

教育研究活動報告

学園祭における食育の実践
—保育士、栄養士をめざす学生の取り組み—

浅野 美登里 坂本 裕子 落合 利佳
鳥丸 佐知子 中島 千恵

保育園における食育の推進には、保育士や栄養士に食育の実践力と相互の連携力が求められている。しかし、養成課程のカリキュラムでは他学科との連携授業や食育実践の場が設けられていない。そこで、実践力や連携力を培う試みとして、児童教育学科と家政学科食物栄養専攻の5つのゼミが共同で、学園祭において食育の実践を行った。学生が主体となって展示やイベントを企画・運営する過程は、食意識を高めると共に協調性・連帯性・専門性を培う上で有効であったと考えられる。

キーワード：保育士、栄養士、食育実践力、連携力、食意識

1. はじめに

食育基本法の施行後、保育所ではどのような食育が行われているのか、その内容や活動状況に高い関心と期待が寄せられている。また、担当者である保育士、栄養士には実践力と相互の連携力が求められている。しかし、養成課程のカリキュラムを見ると、食育に関しては他学科との連携授業や実践的な活動の場がないのが現状である。

そこで、我々食育研究チームは、各々が所属学科で担当している保育ゼミ（児童教育学科）と食生活研究ゼミ（家政学科食物栄養専攻）の授業計画に、学園祭を実践の場とした学生主体の食育活動を取り入れた。5つのゼミが学科・専攻の枠を超えて協働し、各々の特色や専門性を活かした食育活動を展開したので報告する。

2. 活動のねらい

学生にはこの取り組みを通して、食育の実際を主体的・体験的に学ばせ、将来、食育に携わる者としての食意識を高めさせたい。また、イベントの企画や運営など共同で行う活動に参加することで、各々の学科・専攻の特色や専門性の活かし方と連携の重要性を知り、相互の連携力を培ってほしい。

3. 活動の概要

(1) 「ちーむ食育」の結成と共通テーマ「楽しく食育」の決定

2008年7月、指月祭（11月1日、2日）の参加に向けて表1のメンバーで食育実践グループを結成した。グループ名を「ちーむ食育」とし、共通テーマに「楽しく食育」を掲げ準備活動を開始した。

表1. ちーむ食育の構成

学科・専攻	ゼミ	人数
児童教育学科	Aゼミ	11
	Bゼミ	20
	Cゼミ	17
食物栄養専攻	Dゼミ	10
	Eゼミ	16
計		74

(2) 企画・運営

展示やパフォーマンスなどのイベント内容：

ゼミごとに共通テーマ「たのしく食育」に基づいた内容と実践方法を検討した後、重複しないように、ゼミ代表者による運営会議で調整し最終決定した。この過程で近畿農政局と連携し、子どもたちが関心を示す食育のテーマや効果的なプレゼンテーションの方法について研修した。

実施スケジュール：学園祭全体のスケジュールを考慮し、チーム内のゲームや実演の実施スケジュールを決定した。

広報：できるだけ多くの人に参加してもらえるように、学内にはパンフレットやポスター、立

て看板で知らせ、近隣の保育園にはリーフレットを配布し参加を呼びかけた。広報に用いた媒体の作製には、児童教育学科の学生が活躍した。

4. 会場風景

会場は常照館214講義室を使用した。展示やゲーム、実演の内容と入場者の動線を検討し、効果的なレイアウトを決めた。

2日間の来場者は268人（子ども106人、大人162人）で、両日も盛況であった。



写真1. 立て看板



図1. 案内文（指月祭パンフレットに掲載）



写真2. 会場風景

5. 実践内容

(1) 食物栄養専攻の企画

食生活研究ゼミにおける取り組みをベースに幼児、女子学生、成人と各ライフステージでの食育を展開した。「朝食の重要性」、「野菜の望ましい摂り方」、「アレルギー対応食」、「お箸の使

い方」、「行事食の意義と意識」、「保育園での食育実践報告」など食生活や食習慣、食文化に関わる多様なテーマで食育を行い、学生だけではなく、子どもや一般の入場者にも関心を持たせることができた。実践方法もパネルや実物食材の展示、ペープサートを使った実演など対象者の年齢や理解度を考慮した上で、各々のテーマに適した媒体を作製し効果を上げることができた。



写真3. 食物栄養専攻の企画より

(2) 児童教育学科の企画

子どもと接する機会の多い児童教育学科は、「お買い物ゲーム」、「食育クイズ」、「豆つかみ大会」、「魚釣りゲーム」、「ランチョンマット作り」などのように、子どもが興味を示す参加型の企画をメインに展開した。これらは子どもだけではなく、親と子が一緒に楽しみながら食について学ぶことができる点がよかった。その他、食の安全性を取りあげた展示、野菜嫌いを直すレシピ集の作成など保護者を対象にしたテーマ

にも取り組んだ。

(3) 近畿農政局との連携企画

入場者を対象に食事バランスガイドの理解を深めるクイズ、「クイズ・ザ・食育」を行った。学生が種々の役割を演じながら進行したが、年代や知識レベルの異なる対象者に関心を持たせる難しさを学ぶことができた。また、行政が行っている食育推進活動を知る機会にもなった。

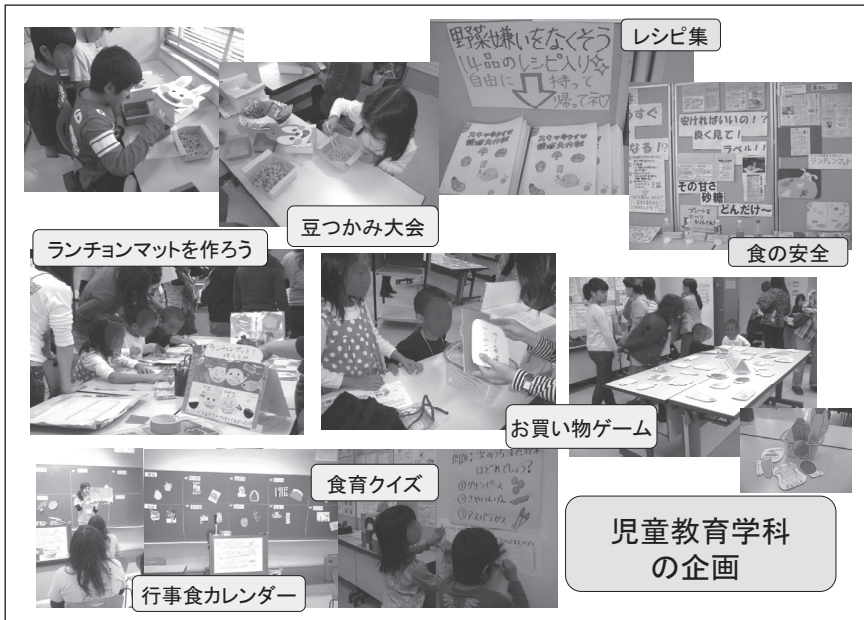


写真 4. 児童教育学科の企画より

(4) 保育所栄養士（卒業生）の食育実践報告

京都市内の保育所勤務の栄養士が、自園での1年間の食育活動をパネルで展示した。給食メニューや園児の食事風景、トマトや二十日大根

の栽培活動、お団子やクッキーを作るクッキング保育など園児の生き生きとした様子が紹介され、食育の必要性と栄養士・保育士がどのような取り組みをしているのか知ることができた。



写真 5. 保育所栄養士の食育実践報告

6. 学びの振り返り

学園祭終了後、本取り組みについてゼミごとに、(1) 企画決定までのプロセスでの学び (2) 他専攻、他ゼミとの連携 (3) 食育についての学びの3項目について、質問紙による自己評価と話し合いによる振り返りを行い、取り組みの効果を検討した。自己評価の回答者数は71名(児童教育学科45名、食物栄養専攻26名)であった。

(1) 企画決定までのプロセスでの学び

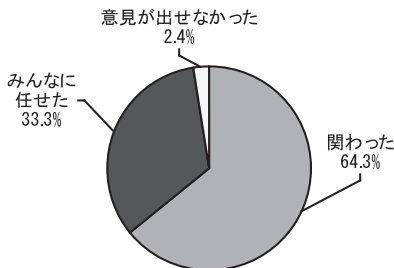


図2-1. 主体的な関わり (児童教育学科)

企画決定までのプロセスに主体的に関わったかどうかの評価結果を学科・専攻別にみると、展示やパフォーマンスの内容を決める際、ゼミ内で積極的に意見を出すなど「主体的、積極的に関わった」と評価した学生は児童教育学科64.3%、食物栄養専攻15.4%で児童教育学科が有意に高かった。食物栄養専攻学生の関わり方は「皆の意見に任せた」が65.4%と多く、「意見が出せなかった」や「先生に任せた」など主体性、積極性に欠ける評価が児童教育学科より多く見られ、学科・専攻による学生の特徴が現れていた。

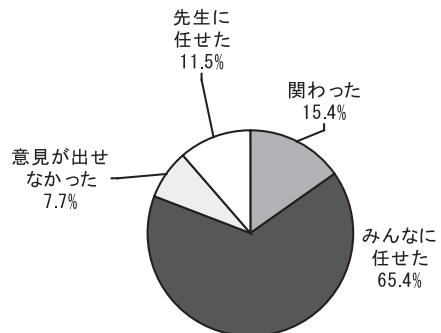


図2-2. 主体的な関わり (食物栄養専攻)

(2) 他専攻、他ゼミとの連携について

連携の程度を他専攻の学生とのコミュニケーションから検討した。「よく話しをした」は12.1%と少なく、51.5%の学生が「あまり話しができなかった」と回答していた。「もっと一緒に話し合ったり、活動する機会があればよかった」との感想が多かった。準備期間中の7月から9月末までは、両専攻とも保育園実習や校外実習、就職活動で最も多忙な時期であったことから、全員で顔を合わせる機会を設けることができず、交流の不十分のまま学園祭当日を迎えてしまったことに原因があると考えられる。

しかし、学園祭当日の活動状況をみると「一緒に活動できた」が30.9%で「できなかった」

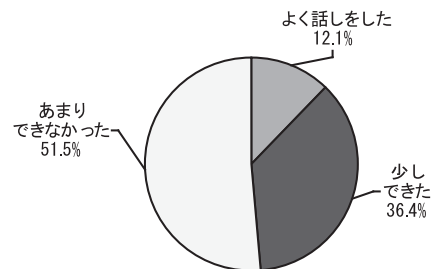


図3. 他専攻との会話 (全体)

は10%と少なかった。また、59%は「一緒に活動できて良かった」とこの合同企画を肯定的に受け止めていた。児童教育学科の学生は、食物栄養専攻の栄養学や調理学的な知識に基づいたアプローチに、食物栄養専攻学生は児童教育学

科の子どもに視点を置いた企画に触発されており、共同・連携することの大切さを知る有意義な機会となった。

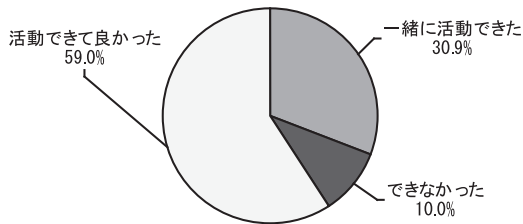


図4. 他専攻との活動状況 (全体)

(3) 食育についての学び

食育について「今まで知らなかったことを学べた」59%、「知っていることも再度学べた」34%、「あまり学べなかった」7%であった。結果より、93%の学生はこの活動を通して何らかの学びがあったことを実感していた。正しい情報や安全な遊びを提供する立場になった者としての責任感や意欲が意識を高めるのではないだろうか。

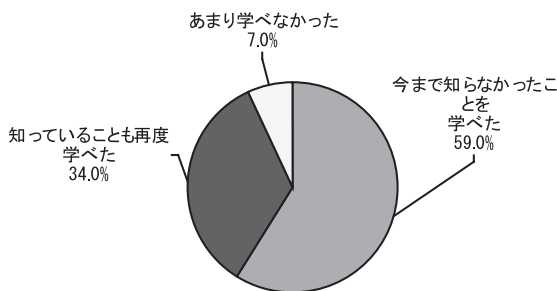


図5. 食育についての学び

7. まとめ

学科・専攻の枠を超えた取り組みには、時間

的な制約をはじめ、学生たちの意欲や意識の違いなどいくつかの問題もあったが、得るものが多い取り組みであった。

食育実践のために企画を立て内容を検討するプロセスは、食意識の低かった学生にも「食」に関心を持たせ、問題点に気づかせる良い機会となった。また、学生から「もっと積極的に関わればよかった」、「自分の意見や考えだけを主張するのではなく、仲間の声をきちんと聞き協力して進めることが大切であると感じた」など多くの人との関わりを通して、連携に不可欠な相手を思いやる気遣い、忍耐や協調について気づきが見られた。さらに、参加者から掛けられた「楽しかった」、「ためになった」などの言葉から充実感や達成感を得ることができた。

保育所栄養士による食育活動の紹介は、保育所での食育の実際を知るとともに、保育士と栄養士の連携を理解するうえで効果があった。先輩の活躍を知ることは将来像が具体化し、職業観の形成にもプラスになると思われる。

本取り組みにおける課題は、ゼミ間で共有する時間が少なかった点である。全員揃って意見を交換する場や意志決定の場を設けることができず、学生間の意志の疎通や準備が十分とはいえなかった。しかし、学科・専攻の枠を超えて一つの活動、「学園祭における食育の実践」に取り組んだことは、学生の食意識を高め、協調性や連帯性、専門性を培う上で有効であったと考える。今後もこのような実践的な学びの機会を増やす必要があるのではないだろうか。

尚、本研究は京都文教短期大学研究助成、科学研究費（萌芽研究）の助成を受けて実施したものである。